

(Non) genericity と テンスの形式

(Non) genericity and Tense System in Japanese

山森 良枝

Yoshie Yamamori

同志社大学

Doshisha University

yy080707@gmail.com

Abstract

I give an account of the distributional pattern of Japanese tense morphemes such as *ru* and *ta*. The argument is based on empirical and theoretical considerations for their semantic relationship to the episodic/generic distinction, which has been previously proposed in Carson (1977) and Carlson & Pelletier (1995).

Keywords — Genericity, Tense Morphemes, ‘*Ru*’, ‘*Ta*’, Japanese

1. はじめに

日本語の述語には (ス) ル形・(シ) タ形(以下、ル形・タ形と記す)の両方が使用できる場合と片方しか使用できない場合がある。本研究の目的は、このル形とタ形の分布を支配している制約はどのようなものかを明らかにすることにある。ここでは、現場を離れた場合とそうでない場合を区別し、現場を離れた場合の発話について、Carlson (1977) の存在論を援用して、(1) stage, object, kind の存在レベルのうち、ル形は individual-level 述語、タ形は stage-level 述語に対応する意味を表示すること、(2) この違いがル形とタ形の分布を制約していること、を提案する。

2. 現象

定延 (2004) によると、山で、{花が咲いている/虫が鳴いている} のを見つけた時、(1a, b) のように、このことをル形とタ形のどちらを使って表現してもよい。

- (1) a. こんなところに花が {咲いている/咲いていた}
 b. こんなところに虫が {鳴いている/鳴いていた}

しかし、花の美しさや虫の大きさについて言う際には、(2a, b) のように、ル形しか使えない。

- (2) a. きれいだな～ / *きれいだったな～
 b. 大きいな～ / *大きかったな～

ところが、帰宅してこのことを話す時には、(3a, b) のように、再び、ル形とタ形の両方を使うことができる。

- (3) a. あの山の花は {きれいだよ/きれいだったよ}
 b. あの山の虫は {大きいよ/大きかったよ}

2. 先行研究

日本語学では、タ形について、概して次のようなことが指摘されている。

- (4) 発話時以前に観察された状態だけを切り離して独立に叙述するもので、発話時以前の観察行為の存在を暗示するために活用される (金水 1998, 井上 2001, 定延 2004 他)。

例えば、(1a, b) では、ル形の場合、山歩きの途中、偶然花や虫を見つけたことを表すだけである。これに対して、タ形の場合には、山にどんな植物や昆虫が生息しているのかを探索していたところ、当該の花や虫に行き当たった、という読みが付加される。これが、(4) の言う、タ形による「発話時以前の観察行為の存在の暗示」である。

定延 (2004) は、(4) を踏まえて、(1)-(3) におけるル形・タ形の選択制限について、次のように述べている。

- (5) 山を探索領域とするマクロ探索は探索時間が長く存在情報以外の情報も得るため文型の制約がない。一方、発話現場の一瞬の出来事を領域とするミクロ探索では得る情報が限定的で文型が制約される。

言い替えると、突然生じた眼前の出来事はル形でしか表せない。しかし、現場に制約されなくなると、つまり、「探索時間」が長くなると、ル形・タ形の両方が使用可能になる、ということである。

では、数日後に上の体験を思い出して回想する場合を見てみよう。その場合、(6a,b)が示すように、タ形だけが可能である。

- (6) a. あの花は、{*きれいだな/きれいだっ
な}
b. あの虫は、{*大きいな/大きかったな}

(6a, b)は、現場から隔たった時空間での発話であり、マクロ探索の例だと考えられる。とすると、(5)からル形もタ形も認可されることが予測される。しかし、実際には、タ形だけが認可される。

また、これとは逆に、現場から隔たった時空間での回想であっても、(7a, b)のように修飾節を使ってどんな「花/虫」であったかを限定する場合には、ル形しか認可されない。

- (7) a. 山で{きれいな/*きれいだっ
た}花を見つ
けたよ
b. 山で{大きい/*大きかった}虫を見つけた
よ

3. エピソード文と属性叙述文

そこで一旦、「ミクロ」「マクロ」「探索」という概念から離れて、Carlson(1977)の存在論の枠組を援用して現象を整理してみよう。ここまでに見た例を、特定の時空間に束縛された出来事を表すエピソード文(episodic sentence)か、特定の時空間に束縛されない恒常的な事物の性質を表す属性叙述文(characterizing sentence)か、という観点から捉え直すのである。

Carlson(1977)によると、エピソード文は、(8b)のように、「普通は/いつも(は)/概して/一般的に」などの習慣を表す副詞と共起できないが、他方で、(8c)のように、存在文に言い換えることができる。

- (8) エピソード文(episodic sentence) :
空間的に束縛され、短時間しか存在しない出来事を表す。
a. 犬が吠えている
b. *犬が {普通は/いつも(は)/概して} 吠えている
c. 吠えている犬がいる

一方、属性叙述文は、(9b)のように、「普通は/いつも(は)/概して/一般的に」と共起できるが、(9c)

のように、存在文に言い換えることができない。

- (9) 属性叙述文(characterizing sentence) :
恒常的な事物の性質を表す。
a. ここの生徒はおとなしい
b. ここの生徒は {普通は/いつも(は)/概して} おとなしい
c. ??おとなしいここの生徒がいる

これを § 1 の例に適用してみると、(1a, b)は、(10a, b)のように、存在文に言い換えられるので、「現場」によって時間的にも空間的にも束縛された事象を表すエピソード文であることが分かる。

- (10) a. こんなところに咲いている花が{ある/あ
った}
b. こんなところに鳴いている虫が{いる/い
た}

また、現場で、花や虫の様子について言う(2a, b)も、(11a, b)が示すように、「いつも/概して」等と共起できないことから、エピソード文だと見なすことができる。

- (11) a. * {いつも/概して} きれいだな~
b. * {いつも/概して} 大きいな~

さらに、下山後に、山での出来事を報告する(3a, b)では、ル形とタ形の両方が使用できた。ところが、(12a, b)が示すように、ル形は「いつも/概して」と共起できるが、タ形はこれらの副詞と共起できない。そのため、ル形の場合は属性叙述文、タ形の場合はエピソード文を作ると考えられる。

- (12) a. {いつも/概して} あの山の花は、
{きれいだよ/*きれいだっ
たよ}
b. {いつも/概して} あの山の虫は、
{大きいよ/*大きかったよ}

また、タ形だけが可能であった回想文の(6a, b)も、(13a, b)のように、「いつも/概して」と共起できず、エピソード文に分類される。

- (13) a. * {いつも/概して} あの花は、きれいだっ
たな
b. * {いつも/概して} あの虫は、大き
かったな

以上は、ル形は「いつも/概して」と共起し属性叙述文を作り、タ形は共起せず、エピソード文を作る、という傾向をもつことを示している。

ただし、(7a, b)の名詞修飾節「きれいな花/大きい虫」では、ル形だけが使用可能であるにも拘わらず、(14a, b)のように、「いつも/概して」と共起することができない。

- (14) a. *山で {いつも/概して} きれいな花を見
つけたよ
b. *山で {いつも/概して} 大きい虫を見つ
けたよ

この点を、ル形の生起位置に着目してもう少し明確にしてみよう。(7a, b)の「きれいな花/大きい虫」は、「見つけた」を主動詞とする主節に埋め込まれた名詞修飾節である。そのため、これらは、時間的には安定した性質をもった個体(object)であるものの、他方で、発見現場による空間的な束縛を受ける。つまり、この花や虫は、ある場所では、見つけられるかもしれないが、ある場所では、見つけられないかもしれず、「いつも」発見されるとは限らない。「いつも」と共起できないのはそのためである。

一方、「きれいな/大きい」と同じく状態性述語に類別される「そびえている/優れている」などのテイル形でしか使用されないという特徴をもち、金田一(1950)が「第4種の動詞」と名付けた動詞は、時空間的な束縛を受けない恒常的な状態を表す。しかし、それにも拘らず、(15a-c)の名詞修飾節に生起するこれらの動詞には、タ形だけが認可される。

- (15) a. 旅先で、高く{*そびえる/そびえた} 山
を見た
b. 旅先で、{*優れる/優れた} 論文を読
むことができた
c. 日韓両語にはよく{*似る/似た} 語が
ある

影山(1996)は、名詞修飾節において、属性叙述の用法を持つ(影山の用語では、完了形容詞¹の意味を表す)動詞のうち、タ形を取る動詞は、他動詞と非対格動詞の中でも状態変化を表すものに限られる、と言う。次はその例である(影山, 1993)。

(16) a. 他動詞 :

大きく開けた口、白く塗った壁、
よくゆがいたスパゲティ、煮た魚、
ゆでた卵、磨いた靴

b. 非対格動詞 :

腫れた足首、たまった水、さびたナイ
フ、腐った野菜、縮んだセーター、落
ちた葉っぱ

c. 非能格動詞(過去解釈ならOK) :

#踊った少女、#泳いだ子供、#暴れ
たやくざ、#泣いた赤ん坊、#きらめ
いた星

影山は、(16a, b)の動詞はどれもある結果状態に到達するという要件を充たすものであることから、結果状態への到達可能性がタ形動詞に完了形容詞としての用法を与える要件である、と述べている。従って、他動詞、非能格動詞のうち、結果状態への到達、というアスペクトを表さない打撃や接触を表す他動詞、および、結果状態を表さない非能格動詞が、完了形容詞として使用されることはない。また、非対格動詞でも、状態を表す動詞が完了形容詞として使用されるためには、(17)が示すように、ル形を取る必要がある。

(17) 非対格動詞 :

注目に{*値した/値する} 作品
長時間を{*要した/要する} 課題
語用論に{*属した/属する} 問題
城を{*取りまいた/取りまく} お堀

¹ 山岡(1999, 2000)は、ル形で属性叙述文の述語として用いられ、時制が未来ではなく「超時」(寺村の用語)として解釈され、かつ、「非常に役立つ」のように程度副詞によって修飾され得る動詞を「属性動詞」として範疇化することを提案している。山岡の主張とル形を「individual レベル」述語として捉える本研究との親和性は高いと考えられる。

(16) と (17) を比べてみると、タ形を取る (16) の名詞修飾節に生起する動詞は、状態変化の結果を表し、それは、時空間間的に束縛されたエピソード的な出来事を介してもたらされたものである。これに対して、ル形を取る (17) の名詞修飾節に生起する動詞は、少なくとも時間的に束縛されない恒常的な状態や性質を表している。

では、先程の (15a-c) の名詞修飾節に現れる「第4種の動詞」が、(本来、ル形を取るべき状態動詞であるにも拘らず)、タ形を取る理由は何だろう。ここでは、金田一 (1950) が指摘するように、テイル形でしか使用し得ない、という「第4種の動詞」の特殊性に着目してみよう。

- (18) a. あの山は高く {*そびえる/そびえている}
 b. この論文は {*優れる/優れている}
 c. 日韓語の文法はよく {*似る/似ている}

これらの動詞は、非意図的な事象を表す点で、非対格動詞に属すると考えられる。先述した通り、影山(1996)は、非対格動詞でも、状態を表す動詞を完了形容詞として使用するためには、ル形を使う必要があると述べている。しかし、これらの動詞ではル形 (の使用) が排除されている。そのため、タ形を選択せざるを得ないのだ、と考えられる²。ただ、このように特殊なふるまいを示す「第4種の動詞」を除けば、名詞修飾節に生起する動詞についても、概ね、ル形は属性叙述文、タ形はエピソード文に関係することが確認できる。

同じ傾向は、主節主動詞として生起する動作動詞においても見ることができる。次の例は、冒頭にあげた事例の主動詞を状態述語から動作動詞に替えたものである。

- (19) a. こんなところで花子が {踊っている/踊っていた}
 b. こんなところで虫が {鳴いている/鳴いていた}
 (20) a. 上手に踊るな〜/*上手に踊ったな〜
 b. 大声で鳴くな〜 / *大声で鳴いたな〜
 (21) a. 花子は上手に {踊るよ/踊ったよ}

b. あの山の鳥は {大声で鳴くよ/大声で鳴いたよ}

- (22) a. 祭りで、上手に {踊る/*踊った} 少女を見つけたよ
 b. 山で {大声で鳴く/*大声で鳴いた} 鳥を見つけたよ

ここでも、現場を離れた (20)-(22) の発話が、ル形は属性叙述文として、タ形はエピソード文としてそれぞれ解釈されている。

以上を、〈時間と空間による束縛〉の有無という観点から見れば、現場によって時間的にも空間的にも束縛された個体の局面を表すル形を含む (1a, b) (2a, b) や (19 a, b) (20a, b) だけでなく、タ形を含む場合の (3a, b) (6a, b) も、過去の観察現場に時間的・空間的に束縛された「あの花/あの虫」の一局面を表していて、エピソード文の認定には、時間的・空間的束縛が決定的な役割を果たしていることが窺える。一方、ル形を含む場合の (3a, b) (7a, b)、(21 a, b) および (22a, b) は、個体の少なくとも時間的に安定した性質を表す点で共通している。従って、属性叙述文の成否においては、時間的に束縛されないことが決定的な役割を果たすことが分かる。

以上をまとめると、[表1]のようになる。

[表1]

	エピソード文	属性叙述文	時空間的束縛
(1a, b) ル/ タ	---	---	(+時空間)
(19a, b) ル/ タ	---	---	(+時空間)
(2a, b) ル/*タ	---	---	(+時空間)
(6a, b) *ル/ タ	---	---	(+時空間)
(3a, b) タ	ル	---	(+時空間/-空間)
(7a, b) ---	ル/*タ	---	(+空間/-時間)
(20a, b) ---	ル/*タ	---	(+空間/-時間)
(21a, b) ---	ル/*タ	---	(+空間/-時間)
(22a, b) ---	ル/*タ	---	(+空間/-時間)

[表1]から、(23)のように言うことができる。

- (23) 時間的、空間的に束縛された事象はタ形、少なくとも時間的に束縛されない事象はル形を取る。ただし、この区別は、現場 (発話現場=観察現場) において捨象される。

² ただし、この結論は暫定的なものとしておく。

これに Carlson(1977)の存在論を当てはめると、どのようになるのだろうか。次のセクションでは、この点について見てみよう。

4. Carlson(1977)の存在論

Carlson(1977)の存在論では、事物の存在レベルを stage, object, kind の3つに分類することが提案されている。このうち、object と kind は individual(個体)として、個体の時空間的な局面を表す stage と対立するとされる。

Kind は「リンゴ」「みかん」といった時間、空間に束縛されず存在する事物の類概念を表す。それに対して、Object は、テーブルの上にある「リンゴ」や「みかん」、あるいは、飼い犬のポチのように、時間的に恒常的に存在するが、空間による束縛を受ける事物が当てはまる。Kind と object は時間的に安定した存在であるという点で、individual(個体)と呼ばれる。この kind や object、つまり、individual(個体)の時間的切片/スライスが stage である。

(24) Kind (類) : 時間、空間に束縛されず存在する事物の類概念。

e. g. 「リンゴ」「みかん」

Object(個体) : 時間的に恒常的に存在するが、空間による束縛を受ける個体。

e. g. テーブル上の「リンゴ」「みかん」、飼い犬の「ポチ」

Stage (局面) : kind や object、つまり、individual(個体)の時間的切片/スライス

e. g. [ポチ] のスナップショット

Stage, object, kind は、言語的には、(25)のように表現される。

- (25) a. Dogs are intelligent. (kind)
 b. Italians smoke. (kind)
 c. John smokes. (object)
 d. A dog is barking. (stage)
 e. John is smoking. (stage)

(25a-c) が individual-level 述語、(25d,e) が stage-level 述語である。(25)が示すように、stage は individual(個体)の時間的切片であるため、stage に用いる述語は、object と kind のどちらにも用いることができる。また、object だけに使えて kind に使えない、という述語はない。こうしたことから、Carlson は、stage-level 述語と (object と kind の individual(個体)に用いられる) individual-level 述語という2タイプの述語を設定し、stage-level 述語から individual-level 述語を作る、即ち、stage-level 述語を individual-level 述語に写像する generalization function (Gn function) という関数を導入している。例えば、(26) と (27) の a 文と b 文の意味は以下のように記述される。

- (26) a. John is smoking.
 a' . Smoke(John)
 b. John smokes.
 b' . Gn(smoke)(John)

(Carlson and Pelletier, 1995:20)

(26a') の smoke は、個体、または、stage のしかるべき状態を表す述語、また、(26b') の Gn(smoke) は、smoke から派生した属性述語に対応する。従って、(26a) は John の喫煙の局面—stage、(26b) は、喫煙が John の習性であるという John の特徴を表すことになる。同様に、(27a', b') の italians は、イタリア人という類概念 (を表す Italians) に適用される述語である。(27a) は、複数のイタリア人の喫煙の stage、(27b) は、喫煙がイタリア人の習性であることを表している。

- (27) a. Italians are smoking.
 a' . $\exists x$ [italians(x) & smoke(x)]
 b. Italians smoke.
 b' . Gn (smoke)(italians)

(26a, b) (27a, b) の主語はいずれも同じであることから、エピソード文か属性叙述文かを決定する要因は、主語名詞ではなく、述語のタイプ—stage level 述語か individual level 述語か—であるとされる。そして、stage-level 述語と individual-level 述語の違いは、(28)が示すように、

stage-level述語が時空間項 (Davidsonian項) を伴うのに対して、individual-述語は伴わない、という違いに還元されると考えられる³。

- (28) a. John is smoking on the lawn/this morning.
b. John is a smoker (*on the lawn/*this morning).

(26b) (27b)は generic sentence と呼ばれるが、このタイプの文は、know French のように恒常の状態を表す述語によって語彙的に表示される場合と、speak French のように習慣(同じ動作の累加)として表示される場合とがある。両者の違いは、speak French in (a situation) という speak French と状況との意味関係が、エピソード述語によって語彙的に表示されるか、show knowledge of French in (a situation) という show knowledge of French と状況の意味関係が語彙項目によって表示されないか、にある。ただし、後者の状態述語は状況を一般化すると捉えるなら、次のように、両者の意味を統一的に記述することができるようになる (Carlson and Pelletier, 1995:38)。(s は situation の変項、GEN は顕在的な量化副詞を欠く属性叙述文を量化する generic quantifier。)

- (29) a. speak French: $\lambda x \text{GEN}[x, s;](x \text{ in } s;$
 $x \text{ speaks French in } s)$

³Kratzer (1995)によれば、例えば、(i)の is dancing は、stage-level 述語であるので、時空間項—Davidsonian 項—の変項を含む。ここでは locative の ‘on the lawn/this morning’ が変項の値となっている。一方、(ii)の ‘dancer’ は individual-level 述語に分類され、Davidsonian 項は含まない。

- (i) Manon is dancing on the lawn/this morning.
[dancing(Manon, 1) & on-the-lawn(1)]
[dancing(Manon, 1) & this-morning(1)]

- (ii) Manon is a dancer.
Dancer (Manon)

(Kratzer, 1995:128)

- b. know French: $\lambda x \text{GEN}[x, s;](x \text{ in } s;$
 $x \text{ shows knowledge of French in } s)$

しかし、GEN 演算子は、量化領域の設定に関して次のような問題に遭遇することになる。(30)の習慣文を見てみよう。

- (30) Mary smokes cigarettes/ *cigarette.

(30)は、Mary が喫煙する状況—Mary smokes a cigarette—の累加を表す。とすると、GEN 演算子の量化対象はエピソード述語の “smoke a cigarette” になる。従って、得られる習慣文は、“Mary smokes a cigarette” となるはずである。しかし、実際に得られる文は、複数名詞 cigarettes を含む(30)でなければならぬ。そこで、名詞句が表す数に関して制限を設けないことを、generic 文の前提条件とすると、今度は ‘a cigarette’ も ‘cigarettes’ も認可される、(31a)のような例が説明できなくなる。

- (31) Mary smokes (a cigarette)/(cigarettes)
after dinner.

そのため、Carlson and Pelletier(1995:40)は、(30)と(31)の違いを説明するために、量化の対象を、目的語が表すタバコから状況へとシフトすることを提案している。つまり、明示的に状況を制限する ‘after dinner’ を含む(31)では、たった1つの状況が量化の対象である。これに対して、非明示的に量化が行われる(30)では、状況の合計が量化の対象になる。この違いは次のように記述される。

- (32) a. $\text{GEN}[s;](\text{Mary in } s; \exists x(\text{cigarette}(x)$
 $\& \text{Mary smokes } x \text{ in } s))$
b. $\text{GEN}[s;](\text{Mary in } s \& \text{after-dinner}(s):$
 $\exists x(\text{cigarette}(x) \& \text{Mary smokes } x \text{ in } s))$

(32a)では状況sのサイズは限定されていない。Maryが異なるタバコ x_1, x_2, \dots, x_n を吸う状況の合計： $s=s_1 \oplus s_2 \oplus s_3 \dots \oplus s_n$ が量化の対象である。

5. ル形とタ形の分布(条件)

では、generic 文とエピソード文の区別をル形とタ形に適用してみよう。ここでは、文が表す出来事を Carlson(1977)の存在論に当てはめるために、stage を状況(situation)と呼びかえ、当該の出来事のある局面、スライスとしての状況を表すと見なすと、ル形は individual、タ形は stage レベルに属する事象を叙述する、ということになる。

(33) ル形： individual レベルの(少なくとも時間(・空間)に束縛されず存在する)事象を叙述する

タ形： stage/situation レベルの(時間・空間に束縛される)事象の局面一時空間的切片を叙述する

例えば、ル形とタ形の両方の使用が可能な § 1 の例文(3a)では、ル形は generic 文、タ形は stage/状況を表すエピソード文を表すことになる。この違いに留意して、その意味を記述すると、次のようになる。

(3)a. あの山の花は{きれいだよ/きれいだったよ}

(34)a. あの山の花はきれいだよ
GEN[x, s;] (x in s; ∃ x(flower(x) & beautiful(x) in the mountain (s))

b. あの山の花はきれいだったよ
∃ [x, s;] (flower (x) & beautiful (x) in the mountain at t (s))

(34a)は、総じてあの山の花はきれいであることを表し、(34b)は、あの山の特定の花がきれいであったことを表している。

また、(33)から、(35)を導くことができる(Dahl, 1995)。

(35) ル形：特定の参照時を示唆しない

タ形：発話時以前/過去の特定の参照時の存在を示唆する

ここで「参照時」というのは、話者が文の表す出来事を評価する/した評価時を指す。(35)に基づけば、(1a, b)でタ形を使用すると、参照時が発話時より前に設定されることになり、発話時以前からの観察行

為が示唆される。一方、ル形は発話時に参照時が設定され、そこから過去・未来に向かってリンクが張られるので、このような読みが生じないことが予測・説明できる。また、(2a, b)では参照時と発話時が一致するので、タ形が排除されることが説明できる。(3a, b)では、参照時がル形では発話時(=報告時)、タ形では過去の観察時に設定されるので、前者の場合には属性叙述/generic 文、後者の場合には、過去の出来事に言及するエピソード文、という異なる読みが生じること、さらに、(6a, b)の回想文では、過去の特定の時間に参照時が設定されるので、ル形が使えないこと、他方、当該の「花/虫」時空間を超えた属性を表示する(7a, b)の連体修飾節ではタ形が認可されないこと、などが説明、予測できることになる。

さらに、(33)(35)から、ル形とタ形が(36)のような対比想定を持つことが導出される。

(36) ル形：当該個体/事象と時空間を異にする他個体/事象との対比を示唆する

タ形：当該個体/事象内での時間的推移に伴う変化の推移を示唆する

これによれば、§ 1 の(6a, b)で問題としているのは、他個体の美しさや大きさとの比較ではなく、当該主語が表す同一個体の過去の状態であること、逆に、(7a, b)で問題としているのは、他個体との対比において評価され得る当該個体の属性であること、その結果、(6a, b)ではル形が認可されず、(7a, b)ではタ形が認可されないことが説明できる。

6. おわりに

Generic 文を作るか、エピソード文を作るか、という観点から、ル形とタ形の意味を捉えることにより、一見複雑な様相を呈するル形とタ形の分布条件をうまく捉えることができることを示した。

謝辞

本研究は科学研究費基盤研究 C(課題番号 25370447 研究代表者 山森良枝)による支援を受けている。

参照文献

- Carlson, Gregory N. (1977) *Reference to Kinds in English*. Ph.D.dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Carlson, Gregiry N, and Francis Jeffry, Pelletier (1995) *The Generic Book*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Dahl, östen (1995) “The marking of the episodic/generic distinction in tense-aspect system” In G. N. Carlson & Pelletier F. J. (eds.) *The Generic Book*, 412-425, The University of Chicago Press, Chicago.
- Krazer, Angelika (1995) “Stage-level and individual-level predicates” In G. N. Carlson & Pelletier F. J. (eds.) *The Generic Book*, 412-425, The University of Chicago Press, Chicago.
- 井上 優(2001) 「現代日本語の『た』」つくば文化フォーラム編『「た」の言語学, 97-163, 東京, ひつじ書房.
- 影山太郎(1996) 『動詞意味論』くろしお出版
- 金田一春彦(1950) 『国語動詞の一分類』(金田一編(1976)所収, 5-26)
- 金田一春彦(編)(1976) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 金水 敏(1998) 「いわゆる‘ムードの「タ」」についてー状態性との関連からー」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』170-185, 東京, 汲古書院.
- 定延利之(2004) 「ムードの『タ』の過去性」『国際文化研究』(神戸大学国際文化学部紀要)21号, 1-68.
- 山岡政紀(1999) 「属性動詞の語彙と文法的特徴」『国語学』197集, 105-118.
- 山岡政紀(2000) 『日本語の述語と文機能』くろしお出版